



あしかびのいのち

岡部伊都子

著者紹介

岡部伊都子（おかべいつこ）

一九二三年、大阪市に生れる。大阪相愛高女を病氣中退。一九五四年より文筆生活に入る。著書に「観光バスの行かない：」「古都ひとり」「鳴滝日記」「北白川日誌」「野の寺山の寺」（いずれも新潮社）など六十冊余がある。

あしかびのいのち

昭和五十六年十月十三日 第一刷発行

著者 岡部伊都子

発行者 江口克彦

発行所 P H P 研究所

京都市南区西九条北ノ内町一一 六〇一

電話 〇七五―六八一―四四三一

東京事務所 〇三―二九五―九二二一

印刷所

大日本印刷株式会社

製本所

© Itsuko Okabe 1981 Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取り替えさせていただきます。

あしかびのいのち――目次

第一章

「男こそなほいとありがたく」

7

小町せかい

17

「女は髪のためでたからんこそ」

31

第二章

玉虫きらめく・飛鳥

45

斑鳩・伎楽流れる空

51

吉野の里

57

嵯峨野・女人の里

63

みちのくみちのく

72

出雲路点描

79

第三章

京の四季

87

月とわたくし

96

木の花・桜

葦牙^{あしかび}のいのち

木の国・御綱柏

京と水

第四章

女帝の都をゆく

女人即位

二上幻影・大伯皇女と大津皇子

光の蔭・長屋王と吉備内親王

実力者・橘三千代

華麗なる振幅・光明皇后

補章

高野山奥の院供養碑

あながき

104

115

121

133

141

156

163

169

175

188

201

228

第一章

「男こそなほいとありがたく」

「書く」ということは、まこと、おそろしきしわざかなと思うことがある。紫式部にひどく憎まれ、『紫式部日記』に「行末うたてのみ侍るは」と書かれた清少納言は、その紫式部の文章に、呪われた。『源氏物語』に感動した世人は、紫式部の憎悪に影響されて、真偽のわからぬ清少納言の晩年を落魄流浪らくはくろうろうの身などと想像する。皇后定子こうごうていしの没後宮廷生活を引退してからの清少納言（清氏）が、そのただならぬ才を発揮する場にいなかったことはたしかだろうが、子もあり、夫もあり、人が興味的に想像するほど、悲惨な境遇ではなかったのではないか。

しかし、その才を思う存分かがやかすことのできない状況になったことは、深い学識を

身につけ、それを時宜に応じて自在に活用する実力をもつ清氏の場合、不幸といいたくなくような一種の名残惜しさを感じるのも人情だろう。僅かな宮仕えの歳月にきらめいた光芒が、短期間であるだけにいっそう鮮やかな光度を印象づける。リズムにのった飛躍的な連想、人の在りかたへのあけすけな批判、いたずらっぽい諧謔かいぎやく、そして「かたはらいたき事」と気にしながらも描く自らの才華さいか。

その内に在って、素直すぎるほど素直に美しく感動的なのは、定子皇后にかかわる叙述である。時には人を灼くほどにも激しい光線の言辞の清氏を、「すさまじ」とする場合もあつたにちがいないが、定子皇后は終始かわらぬ優しさで彼女を包みこみひきたてた。

清艶きよえんの女人定子のみごとな人柄と、その悲運とが、清氏に言いあらわし得ぬほどのせつない気分をもたらしした結果、定子につながる一族への筆もまたやわらかで讃嘆的だ。定子を苦しい立場におとし入れたことへのうらみの口吻さえみられない。

いわばそうした配慮のめぐらされた『枕草子』によって、その男性観をとこう、言うのは危ういと思う。けれど、好き嫌いのはっきりした彼女の感覚的な好みはある程度わかる。読んでいていささかとましく思われるほど、意地悪く男をからかって笑いものにする場合がある。かと思うと知らず知らずの内に「夜居よゐの僧」にのぞかれています女房世界の浅薄さを恥じている。清少納言の宮廷生活は、夫や子をもちながら恋の情もしたたかな女盛り

の時期であつた。一時は恋人だつたらしい藤原実方さねかたとも対等に、世を知る分別、男を覷る余裕。

少女でも老女でもない清氏にとつて、他の女人との学識の差は、男女関係にとつても決定的な役割を演じているように思われる。清氏の和漢の才に辟易へきえきする相手では、どうしようもない。折りにふれての彼女の心くばりや機智の応酬などをほんとうに理解し、切りかえし、受けとめ、ともにたのしんでくれる相手は、そうざらにいるものではない。

当時の宮廷では、漢学をわきまえるのが男の教養であつたから、清氏の機智は大いに評判となつたであらうが、そういう才氣ばしつた女性に対する男性の心には、あまり学問をちらつかせる女は……といった警戒心もあつたはずだ。

清氏に及びもつかない男性からは反感をもたれ、まして、人前であざとくいたためつけられた男性は彼女を憎悪したことだろう。清氏のなかに息づくやさしい魂を知り、その才をも尊びいつくしんだ男性は、清氏に引け目を感じない豊かな学問と教養とを身につけた頭とうのちやうどう中ちゅう将しやう藤原とうげん齊信さいしんや頭とう弁藤原べんとうげん行成ぎやうせいなど、清氏と同じ年頃の人びとだつた。

残念なことに、若き清氏の橘たちばな則光のりみつとの結婚は失敗だつた。則光との間に生まれた則長のりながのことには全く触れられていない。母としての女心は、客観的に綴られた短章を通して知るより他はないが、「憎げなる乳児」に夢中になっている母を「かたはらいたきもの」にいれ

ている。可愛さにとりみださずにはいられないような、子煩悩な母ではなかったとみえる。

則光との絶交の次第が、和歌に直接の因をもっているらしいのは、清氏の複雑な精神構造から考えて、興味深く思われる。

歌人できこえた清原元輔きよはらのもとすけの女むすめという世人の期待が気重く思われたのか、中宮に、詠進せぬゆるしを得ている。当然歌うべき場でありながら歌わぬ場面が描かれている。けれど、和歌嫌いの則光に対しては、かえって和歌を書く。「わかつてほしい」ことがわかつてもらえない悲しみ。則光にとってみれば、「かんにんしてほしい」と言いつづけてきた歌を、さらにおつかぶせてくる心なしの女だった。

互いに、自分に無いものを相手に見いだして大切に考えていたと思うが、則光の遠江とのおとろみ（静岡県）赴任で終わる。清少納言はことの外に六位蔵人を好んだ。則光とも、彼が六位蔵人であった間だけの交流に終ったのか。

どうして六位蔵人がそのように好もしく思えたのか。

「めでたきもの」の項に六位蔵人を佳しとする清氏の所論が述べられている。同じ六位蔵人でも、緑衫ろくせうの衣裳は氣に入らず、青色麴塵きせきじんの袍ほろを着ている姿が氣に入っている。天皇の身辺にあって、天皇のみが着ることのできる麴塵の色の袍を着ることができる蔵人の役。王朝風景にわたる基本色ともいえるものであろうか。

『源氏物語』には、夕霧が六位になった時の落胆の様子が描かれている。対照的なとらえかただ。

美感覺のするどい清氏にとって、男性も美しいことが心をうつ第一条件だ。あまり仏教的因縁因果觀に染まっていない清氏は、平気で好む所を述べて先人觀を打破する。

「説教の講師は、顔よき」などと、およそ人格や内容とは無関係な価値觀が語られていて面白い。美しい僧だと聴聞の衆が皆見つめているから話の尊さもよくわかるが、「にくげなるは」ついでに見をして忘れてしまうので「罪や得らむ」と勝手なことを言っている。不器量な僧は罪に価するという奇抜な発想は、法華八講の「朝座あさざの講師清範せいはん、高座のうへも光り満ちたる心こころち」からきた感想か。

清氏にとっては学問も、宗教も、祭事も、行事も、すべてその魂の欲求とはすこしちがった教養主義的知識、何にしても風俗的関心や美的興味が、彼女にとっては心の飢えをみたす大いなる要素であつたと思われる。

だからその服装についての觀察は細やかだ。季節による微妙な色どり。重ね着のとり合せ。表うへの衣きぬは色とりどりでも、一様に着がえる夏の下着の白襲しろがさねを、すがすがしいところこぶ。藤原道長が少し着ただけの白襲をさっぱりととりかえるおしゃれな様子も記録されて

いる。

「桜の綾の直衣のいみじうはなばなと、うらの艶などえもいはずきよらなるに、葡萄染のいと濃き指貫、藤の折枝おどろおどろしく織りみだりて、紅の色、打ち目などがやくばかりぞ見ゆる。白き、淡色など、下にあまたかさなりたり」とは、すべてに深く洗練された頭中将斉信の、梅咲くひと日の衣裳である。

さらにそうした美しい衣裳の男が、「せばき緑に、片つかた（片足）は下ながら、すこし簾のもと近う寄り居たまへるぞ」絵のようだと賞めたたえている。衣裳がすばらしくとも、その姿勢によつては滑稽なものとなる。着こなし、たたずまいが大切なのだ。

さらに「五月の長雨の頃、上の御局に小戸の簾に斉信の中將のより居たまへりし香は、まことをかしうもありしかな」と、その香のたしなみを「そのものの香とおぼえず」と感じ入っている。清氏好みの男といえよう。

しかも、この斉信は、誤解による疎遠の一時期があつたようだが、清氏との打てばひびく共鳴をよるこび、「うとくてやむはなし」と彼女に言い寄っている。清氏もほとほと賞めたたえている人物だが「さもあらむ後には、得ほめたてまつらざらむが口惜しきなり」と、そうなつてしまふのを避けている。縁を結んでしまつたら、その好きな人のことを、手ばなしで賞められなくなるのがつらい、という清氏。

その潔癖な気性はわかるが、そういつて踏みとどまることのできた一因には、斉信のあまりのはなやかさに氣しんどさを感じている点もあろう。年齢や容貌など、自己をかえりみて斉信を氣の毒がっているところがある。

特別な仲の男のことには、則光と交わりを断つたいきさつのほかは、あまり具体的に記されていない。

頭弁行成とうべんぎょうのこまやかにして親身なかばい立て、とくに「夜をこめて」の歌を行成が殿上じやうじやう人にみせ広めてくれた深い志は、清氏を熱く支えている。逆に清氏もまた、行成の本質を尊敬し、信賴していた。一見ありふれた感じで、特に目立った振舞や洒落つ氣のない行成だが、「おしなべたらず」という清氏の理解をよろこび、「士はおのれを知るもののため死ぬ」と感謝していた。はなやかな斉信への評価とちがった行成への真実心が、感覺のみに終わらない清氏のまごころをあかしだてる。

雑色・隨身ざしき・ずいじんはすこし痩せた細い男がいい、いや稚児や若い男、それに上にたつ人はふつくらしたのがいいなどと、引用にいとまないほど主観的な美的評価をもっている清氏だが、結局は、もてる教養の生かしように、やさしい思いやりのこもった行成の人柄のあたたかさに打たれている。行成は、清氏が心をこめて仕える皇后定子の身を案ずる、僅かな味方の一人であった。

「男の心のうち」を恥ずかしきものとし、「男こそなほいとありがたく、あやしき心ちしたるものはあれ。いと清げなる人を捨てて、憎げなる人を持たるもあやしかし……」と推量のほかの男心を嘆ずる。男というものは心の中であまり好ましく思っていないなくても、「さし向かひたる人を賤し頼むる」もの。

女のことを、「これがことはかれにいひ、かれがことはこれに」言っているのに、聞く女の方では、「かう語るは、なほこよなきなめり」……「自分だけは別よ」と安心しているのではないか。他の男性の女人への仕打ちを非難してみせながら、自分は、身よりの少ない宮仕えの女房などを身重にさせて、そ知らぬ顔でいる男もあるのに。

昔も今もかわらぬ男心の謎と、女心の綾。

その見通しを持つ清氏は、少し愛してくれているらしいと感じる男性に逢っても、「心はかなきなめり」と思ってしまうという。多くの男女の在りようを見てみると、思う男と結ばれても、いずれひとときの愛ではないか、やがて見棄てられてしまうのではないかという不安が、女の心を苦しめるのだ。

「どうせ、そんなものよ。(どんなに気に入った男にせよ)あこがれて縁をもつことがかえって縁を切ることになる」と、はじめからあきらめての客観性があり、それが、世間的に落着いた年長の受領藤原棟世と再婚した落着きだったのかもしれない。